

京都大学	博士(文学)	氏名	横 田 蔵 人
論文題目	知性のうちなる普遍について アルベルトゥス、トマス、スコトゥス、オッカムを中心に		
(論文内容の要旨) 本論文は、スコラ哲学黄金期とも呼ばれるほぼ1世紀の間の、四人の代表的な思想家をとりあげ、「知性のうちに普遍が存在するとはいかなることか」という問題に対するそれぞれの答えを検討することを意図したものである。 普遍 (universalia) に関する中世の論争史は、前世紀の膨大なテキスト発掘の成果により、再構築を余儀なくされている。とりわけ、中世において普遍が議論されるさい、たんに心の外に普遍がどのように存在するのかという問題のみならず、普遍が心のなかにどのように存在するのかという問題もまた同様に検討され、しかも後者は前者とは独立した文脈と問題圏を構成したことはしばしば、見落とされている。4人の思想家を横断的に見ることで、この問題が存在することを示し、その具体相と発展過程を示すことが本論文の目的である。 考察される思想家は、いずれも中世を代表する哲学者であるアルベルトゥス・マグヌス、トマス・アキナス、ヨハネス・ドゥンス・スコトゥス、ウィリアム・オッカムである。この4人の思想家は、関心も、哲学的立場も、また扱っている問題も同一ではない。しかし、彼らは、陰に陽に「知性のうちに普遍が存在するとはいかなることか」という問題に対する答えを与えていると思われる。なぜなら、彼らはみな哲学を行ううえで、この時代を支配したアリストテレスの思想を踏まえ、そこに含まれた問題に応答しなければならなかったからである。 それゆえ、本論文では、まず第1章において、アリストテレスの『魂について(デ・アニマ)』の知性認識論、とくに中世の思想家が「単純把握」と呼ぶ認識のメカニズムを説明する。アリストテレスは、知性認識をある種の「被作用」とであると見なしており、この「被作用」は、彼の運動論一般における説明と同様に、作用者からのある種の形相の受容によって成立する。この基本図式が、ある特定のしかたで理解された場合、厄介なアポリアを生むのである。中世のアリストテレス註解に準拠しつつ、準備的な知識を与えることがこの章の目的である。 第2章は、中世哲学において「知性のなかの普遍」の問題が惹起された1240-50年代の代表的思想家として、アルベルトゥスを取りあげる。同時に、1240-50年代という黄金期の初期スコラ学においてこの問題が生成した理由の第一として、アヴェロエスの『魂についての大註解』の受容の問題があることを示す。アヴェロエスのテキストから「可能知性単一説」を導き出す議論を紹介する。次いで、これらの議論に対する、アルベルトゥスによる時期を異にする二つの応答を検討する。アルベルトゥスは1240			

年代の著作『人間について』と1250年代の『魂についての註解』とで、アヴェロエスの「可能知性単一説」に対して、まったく異なる応答を示している。前者の議論は、アポリアの解決をアヴィセンナから得られた知見に求めるものであり、知性に内在する可知的形象が有する二つの「関係 (comparatio)」の区別により、同じものが同時に個物でありかつ普遍でありうるとされる。つまり、可知的形象は、知性という基体との関係では個物であり、心の外の事物との関係では普遍なのである。ところが、後者において、アルベルトゥスは、アリストテレスの見解により親和的であると判断されたアヴェロエス説への強い親近性を示し、前期の見解を覆すことになる。このようにしてアルベルトゥスは、後に続くトマス・アキナスとラテン・アヴェロエス主義者の双方のアイデアを先取りしていたのである。

第3章では、トマス・アキナスにおける「可知的形象」の役割変更と、それに伴って生じる哲学的アポリアとを検討する。初期のトマスは、アヴィセンナに依拠する初期アルベルトゥスの形象論を用いて「知性のなかの普遍」の問題を解決する。トマスはアリストテレス主義の「可知的形象」の存在論的身分を、認識の「対象」から、対象を表現し、普遍的な認識を可能にする「媒介」へと置き換えることで、この路線をさらに発展させる。けれども、トマスは彼の新しい発想を完全に首尾一貫させることに失敗している。彼の失敗は可知的形象を認識の「媒介」へと置き換えたことによって生じた、実在的文脈と内容的文脈の区別の必要性に気がつかなかった点にある。本章の残りの部分は、この点に関する、ロバート・パスナウの見解を裏書きしつつ、まさにこのような区別が問題になるような理論の枠組を創造したことにトマスの着想の意義があると主張する。

第4章では「可知的形象」のかわりに、トマス哲学における知性の内的対象の位置に置かれることとなった「心の言葉 (verbum mentis)」の存在論を検討する。最初に、「心の言葉」と「可知的形象」と「知性認識の作用」という3つの心的要素の間の相互関係について、トマスの見解をテキストから明らかにする。次いで、トマスが「心の言葉」に適合するような特殊な存在論をもっているかどうかを検討する。得られた結論はネガティブなものであるが、しかし、トマスは後の時代のある種の思想家とは異なり、「心の言葉」を他の要素に還元して消去してしまうわけではないことが確認される。

第五章はドゥンス・スコトゥスにあてられる。最初に、スコトゥスが「知性のなかの普遍」の問題を考える際に「可知的形象」を無用だと考える議論に対して答える理由を検討する。次いで、スコトゥスが「知性認識作用」と呼ばれる作用を「性質」のカテゴリーに置くことで、それは「被作用」だとするアリストテレス的伝統から離反することを示す。その上で、知性認識作用には認識対象に「向かってゆく」という特殊な関係を伴う性質であり、このような対象指向性が、アリストテレス的な考え方とは異なり、因果関係によっては説明できないものであることを示す。スコトゥスが『任

意討論集』で与えている説明によれば、この対象指向性は、さらに、認識作用が対象へ向かうという関係性と、認識作用がある内容をもつという関係性の二種類に区分される。この区分についての研究は、これまでほとんど手付かずであったが、本節において、一定の見通しを示すことができた。最後に、知性認識の対象である普遍的本性が有する存在論的身分について神の有するアイデアについてのスコトゥスの議論から、示唆となる知見を引き出す。

第6章以下の3章は、オッカムに宛てられる。そのうち第6章は、特に初期オッカムにおける「知性のなかの普遍」の理論、すなわち「フィクトゥム説」の正しい理解を得ることを目的とする。オッカムのフィクトゥム説は、「対象的存在」という概念の大ざっぱな適用のせいで、しばしば同時代のペトルス・アウレオリの説と混同されることが多かった。しかし、このような同一視は誤りである。オッカムは「対象的存在」を認める同時代人とは異なり、心の外で存在をもつものが、同時に心の中で存在をもつことをいっさい不可能だとする。この強硬な存在論的前提において、彼の「対象的存在」はアウレオリの「対象的存在」とは異なるのである。

第7章は、前章に引き続き、オッカムとアウレオリの「対象的存在」をめぐる議論をとりあげる。アウレオリは、認識作用がこのような特殊な存在様態において提示される対象を持つべきであるということを、感覚における錯覚現象に注目することで証明しようとする。この証明に対するオッカムの論駁においても、前章において確認されたのと同じく、心の外の存在と心の中の存在との間に明瞭な分断が見られる。

第8章は、オッカムにおける「信念の対象」の位置づけの変遷を、初期のフィクトゥム説の時期から後期のインテレクチオ説までたどる。オッカムはインテレクチオ説の作用によって「知性のなかの普遍」の存在を消去するが、このことによって彼は、命題的態度の対象に関するアポリアに落ち込む。このアポリアを乗り越えるために、オッカムは彼のインテレクチオ説を首尾一貫して適用した新しい理論を組み立てる。

以上の議論からわかるように、中世哲学における「心のなかの普遍」の問題は、いわゆる普遍論争において問われる「心の外の普遍」の問題と重なりつつ、しかし独自の問題圏を構成する。普遍をめぐる論争は「心の外の普遍」をめぐるものだけではなく、心のなかに普遍があるとはどういうことかをめぐるものでもあったのである。この問題は、可知的形象、心的作用、概念などといった心的構成要素をめぐる問題のなかでさまざまに考察され、一見して見えにくい。けれども、心の外に普遍の存在を認めない思想家であっても、心のなかに内的な普遍者が存在することを承認することはありうるのであるし、それがどのようなものであるかについては、議論が続くのである。また、オッカムの「唯名論」と言われるものが真に革新的であるのは、彼が「心の外の普遍」を認めないからではなく、彼が「心のなかの普遍」を認めないからなのである。

(論文審査の結果の要旨)

西洋中世の論争といえば「普遍論争」というほどに、この論争は中世を特徴づけるものであると考えられてきた。われわれは言語を使用するときに「ソクラテス」といった個体を表す固有名だけで済ませるわけにはいかず、「人間」といった普通名詞を用いざるを得ない。そのとき、このような存在者のタイプを示す用語に対応している何らかのものが「普遍 (universalia)」であり、これは「ソクラテスは人間である」とか「プラトンは人間である」というように、複数の個体の述語になるものである。そして伝統的には中世の普遍論争という時、この普遍がわれわれの心の外に事物として存在するのか(実在論)、心の中に存在するのか(概念論)、それとも単なる名称として存在するだけなのか(唯名論)という問題だと考えられてきた。

しかし、現在の中世哲学史研究ではこのような3区分には多くの疑問が投げかけられており、そのまま取りうる見取り図ではないことが共通理解となっている。本論文の著者は、そのような普遍論争に関する研究史を踏まえたうえで、そもそも「普遍がわれわれの知性あるいは心のなかに存在している」という事態がいかなる事態なのかを問題にする。すなわち、普遍に対応するものをどこに措定するのかという伝統的な問いではなく、「知性の中の普遍」そのものの存在様態に関する中世スコラ哲学者たちの解釈の違いの方を問題とするのである。これは中世スコラ哲学における、認識論と存在論が交錯する中心問題の一つである。しかも著者は、この問題が表面化し始めた13世紀中葉からはじめて、14世紀中葉にいたる主要な哲学者であるアルベルトゥス・マグヌス、トマス・アクィナス、ドゥンス・スコトゥス、ウィリアム・オッカムの4人を通史的に網羅し、彼らの理論を膨大なテキストの解釈を通じて提示する。以上の問題設定の斬新さと分析の網羅性によって、本論文は力作と呼ぶに足るものとなっている。

本論文には様々な論点にかかわって多くの新知見や特徴的な解釈が提示されている。その主要なものだけを挙げるならば、以下のような点を指摘できるであろう。第一にアルベルトゥスに関して、これまで1250年代において知性単一説(ラテン・アヴェロエス主義)に近接した知性認識論がよく知られていたが、1240年代の『人間論』という著作の分析を通じて、むしろアヴィセンナ(イブン・シーナー)の影響を強く受けた理論が展開されていることを明らかにした点が挙げられる。すなわち、知性認識を生起させている形相が普遍的であれば認識主体である知性も普遍的となるはずだという知性単一説を排除するために、その形相について、個物である知性の付帯性として個体であるという観点と多数の認識対象に関係付けられる普遍であるという観点を切りわけるという後世に前提とされるような視野を、アルベルトゥスが開いたことが明らかとされているのである。この点に関しては、アルベルトゥスのキャリアの中では後期になって知性単一説により接近したのはなぜなのかという考察が欠落していることが惜しまれるが、アヴィセンナの影響を受けた最初の立場を文献的に明示した功績は大きい。

第二はトマス・アキナス解釈に関する独自性である。アルベルトゥスの前期の解釈をアキナスが受け継いだこと、またそれに加えて、知性認識活動を起動させる形相である「可知的形象 (species intelligibilis)」を認識される対象ではなく認識の媒介として位置づけた点にアキナスの特徴があることは、従来の研究においても指摘されてきた。また、知性内の認識対象として「心の言葉」というアウグスティヌスの伝統と結びつく理論についても丁寧な分析が行われている。以上の点は従来の研究の精密度を高めた成果であるが、著者の解釈の独自性はむしろ、アキナスの提示した解釈が当時としては斬新であるとしても、あるいは斬新であるがゆえに、アキナス自身が自分の理論を十分には彫琢しきっていないと読み取る点にある。日本での研究では最大のビッグネームであるアキナスが過度に重視され、スコラ哲学史を描く際の参照枠とされすぎてきたことに対する著者の果敢な挑戦であり、またその分析には大きな説得力が備わっている。

第三には、オッカムとの関係でペトルス・アウレオリの立場に対する詳細な分析が行われていることは特筆に値する。アウレオリ研究は、本論文で対象とされている4人の哲学者に比べると、批判的校訂版の未整備という問題もあって、日本ではほとんど行われていない。しかし、本論文の主題である知性認識に関しては幸いなことに信頼出来るテキストが存在しているために、部分的であるとはいえ、著者が初めて本格的なアウレオリ研究を提示したと言ってよい。またそれだけではなく、アウレオリの「普遍とは現れとしての存在」だという理論は初期のオッカムによる「普遍はフィクトゥムとしての存在」だという理論とはその実質において同一だとされていた従来の解釈を、著者は明確に否定するに至っている。このことによって、オッカムの理論のもつ革新性をもより鮮明に浮き出させることになっており、研究史上の価値は大きいといわねばならない。

以上3点だけではなく、スコトゥスの極めて精緻で難解な議論の正確な読解にも現れているように、著者の歴史的テキストの分析能力には瞠目すべきものがある。本論文ではあくまで「知性の中の普遍」の問題に関する歴史的文脈の提示が目的とされているために、取り上げられた4人の哲学者たちの立場がそれぞれのより広い哲学体系の中でどのような位置づけを持つのか、あるいはそれぞれの普遍に関する理論それ自体がどのような哲学的価値を持つのかといった考察が乏しいという批判は可能であろう。しかし、それは中世哲学史研究としての本論文が持つ価値を大きく減じるものではないのである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成24年4月2日、調査委員が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。